モンゴル

アルパインツアー　2018 年 8 月 01－04 日

モンゴルの西部、アルタイ山脈の北部にあるタバンボグド山群というところの大草原地帯を歩いてきた。まあ、歩いたといっても、全旅行日程 10 日間の内、日本―モンゴル間の移動に 2 日、モンゴル内での飛行機移動に 2 日、飛行場とトレッキング地点の出入口までの四駆の車移動に２日であるので、歩いたのは４日だけである。今回はアルパインツアーの中で、新コース開発担当の久保典彦さんが過去に案内した人を誘ったということで、参加者は久保ファミリーといった感があった。そんな訳で 2016 年のゼム氷河で一緒だった神戸の元歯科医 F ナハラのジーさんや、T カハシのバーサマと卵アレルギーの M ヤマのバーサマがいた。また 2007 年のマチュピチュでいつも遅れていた H ラノのバーサマもいる、この人も久保ファミリーの一人であったみたいだ。あの時はおとなしそうに思えたが、みんなで談笑している中で“私は毎日が日曜日ではありませんから”などとぴしゃりと言ってのけるところなどケッコウ気が強そうな一面を見た。男は 3 人、もう一人は S ハマさんでいろいろの面で一言居士みたいである。80 歳を過ぎているということだ。見事な白髪である。女は 10 人で、九州からの二人は海外旅行でよく顔

を合わせるらしいお友達。福岡の O チイシさんは自称バックパッカーで見るからに変な髪形、集団行動は好まないというが、気さくな性格でケッコウ誰とでも親しく話している。家は 8000m²の土地に 70 坪の邸宅に住むという。今はダンナと二人暮らしでろくに口もきかないというが、食事は全部自分の担当であるという。出た食事に対して、“こんな食材や調味料が使われている”とかかなりの料理人ふうだ。どうも自分でいうほど変人でもないしいわば自分に正直な人。湯布院の自称山荘に一人で住むという E トウさんは、庭には鹿の通り道ができているというお金持ち未亡人。74 歳とはいえスタイル抜群のいい女。東京都目黒区の Z シさんはただ一人飛行機ではビジネスクラス使用の人、さすが大学教授婦人。ダンナだか本人が日本―ネパール？協会の会員だかで、その関係でアルパインの久保さんと知り合いになったのが縁で山を始めたということで、他のバーサマ達が“あそこも行った、ここも行った”と日本内外の山の自慢話をしあっているのに比べると経験数は少ないが、日本の山岳会の黎明期に最先端をリードして本田勝一などを輩出した京都大学山岳部 OB 会に招かれて山に関する講演を行ったということだからたいしたもんだ。東京都練馬区の U メザワさんは“私は降りが弱いの”という言葉を何回聴かされたことか、本人の弁では日本のアルプスなど主だった山はほとんど登っているみたいであるが、今回のメンバーの中でも最長老を競う一人のようであるから、今は昔日の面影はない。山口県の T カオさんも個性派である。しゃべり始めると一人でいつまでもしゃべりまくっている。なぜか山以外のスポーツは何をやっても駄目であるという。外見的にはスポーツ万能型に見えるのであるが。横浜の K ハラさんは体重 40 kgにも満たない超小型であるが、山経験数は大変なものらしいが、この人も最長老を競う一人のようだ。今回の女性は M ヤマさんを除いて全員名前の末尾は“子”で終わる。最近の親でも書けないような名前よりよほど良い。

ウランバートル空港で迎えてくれたのはガイドのリーダーのバギーさん。身長 191 ㎝ということで、その割にはスリムでいかにもスポーツマンタイプ。日本語の通訳としてムーンさんも付く。小学校中学校は山形で日本の学校へ通ったということで、モンゴル人には見えない。28 歳というにしては腹の出具合が気にかかる。

ヒマラヤなどの高いところに行くときは山に入ったら禁酒するのであるが、今回はせいぜい 3000m ちょぼちょぼであるので成田で F ナハラさんがジョニ黒 1L ビンを買ったのをまねて山に酒を持ち込んだ。成田―ウランバートルは 5 時間半程度のフライトで、それほ

ウランバートル市街

ジンギスハーン像

ど長いとは思われない。

モンゴル西部バヤンウルギ飛行場までの移動は 2 日目の 14 時発であった。1 日にこれ一本しかないとのことだ。このため午前中はジンギスハーン像などウランバートルの市内観光の一部を行った。バヤンウルギ着後 1 時間ほど 5 台の四駆による車移動で最初の宿泊地に着いた、早速テント泊である。先行したモンゴルのスタッフがすでにテントを張って待っていてくれた。リーダーのバギーさんの奥さんもいる。実はこの奥さんが旅行会社の社長であるという。ここは北海道よりも北に位置するので日没は 9 時過ぎである。着いたのは 7 時過ぎであったがまだ十分に明るい。

広大な草原

次の日もまた一日かけて四駆による移動である。当然ガタガタ道であるので、のんびりドライブという訳にはいかない。運転手は精いっぱい頑張って我々に道の凸凹感を与えないように運転してくれているが、それでもやっぱりキツイ。キャンプ管理事務所があるソゴグルに着き、ここでまたテント泊。途中モンゴル名物のゲル(テント状の遊牧民用の住居:移動するときはこのまま馬で引っ張る）を見かける。

テント場　遠くにゲルが見える

明日からの本格的トレッキングの準備で、ムーンさんのリードで 1 時間ほど散策を行った。

トレッキング初日はキャンプ管理事務所の近くにあるゲルの内部見学から始まった。ゲルにはモンゴル風とカザフスタン風の 2 種類があるらしい。この日見たのはカザフ風で天井が高いのが特徴。モンゴル風は天井が低いらしい。

カザフ風ゲルの内部

モンゴルの草原はお花畑でもある。ヒナゲシ・エーデルワイス・キンポウゲ・ワタスゲなどが咲き乱れる。エーデルワイスは今までに見たことがないようにたくさん咲いている。ただし私にはどうも物足りない。背が低く葉っぱが小さいのでエーデルワイスらしい優雅さを感じることができない。この日は今回のトレッキングで一番厳しく 500m ほどの高度差を登る予定であったが、途中水量の多い沢を渡らなければならなく、この間は四駆に頼った。“ベースキャンプまで乗って行ってもいいですよ”と久保さんが言うと、ノンベエ元歯科医 F ナハラさんを始め 3・4 人の女性が手を挙げた。オイオイ、おめえら何しに来たの。ポターニン氷河の畔のベースキャンプまでは 7 時間くらいかかった。この辺りは高度が上がったためか大草原の景観が一層豊かなものになった。この氷河は面白い

ワタスゲ

ポターニン氷河

特徴がある。こんなに河幅が広いのであるから長く続いているのかと思ったら、ここのすぐ先にエンド・モレーン（氷河で押しのけられた土や石）があるという。

　ベースキャンプ付近にはドイツやフランスから来たという人たちもいてケッコウ賑っている。荷物運びのラクダが草を食んでいる。ここのラクダは二コブラクダで、コブの上の方が左右どちらかに曲がっている。次の日はベースキャンプから氷河に沿っての散策である。ポターニン氷河に沿って上がって行く。しばらくは高低差のない道であったが、小高い山に登るときだけは沢沿いの岩のゴロゴロしたところがあった。リーダーのバギーが一人ひとり手を添えて導いてくれる。そこは何とか通過したがさらに草原状の登り坂がしばらく続いて、ここで足が前へ出なくなった。ノンベエ歯科医のFナハラさんにも追い越された。大ショックだよ。まさかこのメンバーの中で付いて行けない事態になろうとは、何なんだ。こ

サイド・モレーン上にて

の大草原はどこへ行っても花満開である。そんなのを見て心をごまかすしかない。

ミヤマシオガマ

男が 3 人であるので、最初の 3 日間は F ナハラさんと一緒で、次の 3 日間は S ラハマさんと一緒である。S ラハマさんは気難しそうな人に見えたが話してみるとそうでもない。どんな内容の話でも合わせてくれる。仕事もいろいろの経験をしているようで、船員として世界中を回ったこともあるらしい。しかし酒は一滴も飲まない。山ばかりでなく、美術館巡りやオペラ鑑賞のツアーなどにも行くみたいだ。ツアーの後で一人で同じ美術館に行った事もあるらしい。

さて、私が今回のツアーの誘いを久保さんから受けた時、“行こう”と決断したのは、そのほとんどがテント泊であるということである。私はテント泊が好きである。自分でテントを持って歩くのには、もうその体力はない。まあ、53 歳くらいまではテントを担いで歩いたものであるが。今はもうその気力もない。海外のトレッキングツアーであると、その辺はポーターやヤクがすべて分担してくれる。今回は四駆とラクダである。四駆のドライバーはテントの設営なども行う。ホテルに泊まるよりもテントの方が気楽である。雨が降ったらいやであるが、一般的にトレッキングツアーは乾期に企画される。そしてそんなことよりも一番の楽しみは、星空を眺めることである。現在は昔ほどきれいな星空を見る視力は失われてしまった。眼科の医者からはまだ白内障の手術をする程ではありませんと言われたが、“白内障の手術をすると驚くほどよく見えるようになる”と言う話を聞いたので 2 年前に手術を行った。手術前よりはよく見えるようになったが、むかし、北アルプスやヒマラヤで見た時ほどには回復しなかった。でも天の川を見るなんて冬季以外の日本の山では不可能であろう。今回も一夜で 4 回くらいは小便に行っ

ベースキャンプのテント場

て星空を確かめた。今回は 24 時を過ぎると、満月に近い月が出てきてしまうのでその時間帯には星の数はぐっと少なくなってしまった。でも、24 時前の満天に輝く星空の大パノラマはまあまあ満足したよ。

馬での難所渡り

下山日は朝から雨であった。最初は少し登って、あとは 700m の降りであるが、7 時間くらいの間でのことだからのんびりした降りと言える。“車で降りたい方はどうぞ”と久保さんが言うとすぐに T カハシさんと K ハラさんはサッサと乗ってしまった。雨が降り出して車が我々に追いつくと F ナハラさんも乗った。本当にこの人たち何しに来たんだろうと思わざるを得ない。例によって U メザワさんが“私は降りがダメなのよ”と言い続けながら歩く。もう解ったよ。この日は最初から馬を連れて歩く。沼地状のところで歩けない時にはこれに乗ることになる。やはり一か所これが必要なところがあった。2014 年のアメリカのジョン・ミューアの時にも沢を渡るときに馬で渡ることがあったが、今回はその時よりも長い。モンゴル人の馬使いがちゃんと先導してくれるのであるがケッコウおっかなびっくりで乗った。我々と同じようなペースで歩いていたフランス人パーティーもこの馬に便乗して渡っていたが、登りで歩いてきた別の外人さんパーティーは何とか渡れるところを探して自力で越えていった。ビンボー人は強い。ヒマラヤなどは乾期にしかトレッキングは組まれないが、モンゴルはヒマラヤ程雨季と乾季がはっきりしていないのかも知れない。ただし夏季と冬季ははっきりしているようで、ムーンさんの話ではトレッキングができるのは年間で 4 か月しかないという。これでは商売にならない。ムーンさんの本業は調理師であるということだ。

登った時とは違う登山口のツァガンゴルに着くとトレッキングは終了である。最後のテント泊を行う。これからの山のツアーで、俺に都合のいいテント泊はあるかなあ。

最後はウランバートルの市内観光である。最初の日も余った時間で少しやったがこの日はチベッタン仏教の寺院見学や歌と踊りのコンサートなどを見た。アクロバットダンスなども交えてそれなりに面白かった。ネパールのチベッタン仏教は小さな村の隅々まで寺院が建てられて行き渡っているように見えるが、ここはウランバートルで大きな寺院を見るに留まった。やはりこういった宗教というものは農耕民族に似合ったもので、モンゴルのような騎馬民族は大寺院を建てるという考えがないのであろう。

マニ車

仏像集団

これでこのツアーのスケジュールはすべて終了で後は帰るだけのつもりで飛行場に行ったのであるが、関東地方を直撃した台風 12 号のために飛行機は欠航になってしまった。一日延期である。30 回以上海外登山を行っているが期日延長は初めての経験だ。しかし、ツアーリーダーやバギーさんたちのおかげで、前日泊まったホテルにすんなり泊まれて事なきを得た。追加料金も保険で何とかなりそうだ。今までは保険は掛け捨てで無駄に使っていたが少しは役立ってもらわないと。